



インタビューに答える周馥儀さん

## 三〇代自らが語るひまわり運動と台湾の新しい世代

周馥儀さんは、二〇一四年三月のひまわり運動で中心的な役割を果たした一人である。現在は彰化にある頼和文教基金会の執行長を務めている（頼和は日本統治期の作家）。

**佐藤幸人** ひまわり運動に参加した動機を教えてください。

**周馥儀** わたしがひまわり運動に参加するのは遠因と近因がありました。わたしのこれまでの生き方は、台湾文化の普及や台湾の主

体性の確立と関係しています。

二〇〇八年以降、馬英九政権のもとで中国への傾斜が進みました。また、馬政権は行政権を行使し、立法権をないがしろにしました。サービス貿易協定もそのひとつです。一方、わたしはこの間、野イチゴ学生運動、大埔での抵抗運動、国光石油化学コンビナート反対運動に加わってきました。わたしは頼和文教基金会の執行長として主に芸術家や文化人に呼びかけ、馬政権期の公共的な問題に関心を払ってきました。これが遠因です。

近因はサービス貿易協定の締結の過程です。わたしたちは締結前日の二〇一三年六月二〇日、郝明義さんの暴露で締結を知りました。当日の朝、わたしたちは芸術家や文化人たちと総統府前の凱達格蘭大道に抗議に行きました。調印後、わたしたちは「黒い島国青年戦線」

（黒色島国青年陣線）を組織し、サービス貿易協定の立法院での審議過程を注目し続けました。さらに、「サービス貿易協定のブラックボックス過程に反対する民主戦線」（反黒箱服貿民主陣線）を組織し、多くのNGOと連携しました。また、文化人を集めて文化部（部は省に相当）と議論の場をつくったり、立法院の公聴会で意見を述べたり、体制内の対話を続けました。しかし、それは協定を効させるための手続きでしかなく、たいへん失望しました。

わたしたちは国民党の多数のもとで、二〇一四年三月にサービス貿易協定が立法院を通過することはおおよそわかっています。立法院の外で審議の監視をしていました。わたしたちは、立法院の決議は恐らく一七日から始まる週の金曜日だろうと思っていますが、内政委員会招集人の張慶忠は月曜日に、何とわずか三〇秒で通過を宣言しました。人々の仕事に影響を及ぼし、論議的となつている協定が、民主的な台湾の、国会という殿堂で、このような方法で通過するとは思いませんでした。こうして最後に堪忍袋の緒が切れたのです。

**佐藤** サービス貿易協定反対運動と、それ以前の運動とはどのように関連していたのですか。

**周** サービス貿易協定以前の運動は、ある面で模擬訓練でした。わたしたちはネットワークを使ってどのように動員し、連携するかを議論し、実行してきました。それは実験であり、試行であり、シミュレーションでした。経験に基づいて修正を加えました。たとえばいかに盗聴を避けるかです。

二〇一三年一〇月一〇日（「国慶節」すなわち建国記念日）前夜、総統府近くの景福門に段幕を張って、馬英九への批判を国際メディアに訴えようとしたことがありました。しかし、呼びかけの過程で、ある人がフェイスブックで漏らしてしまい、警察に知られて失敗しました。ですから、ひまわり運動では動員の過程でどのように機密を守るのかをわかっていました。

**佐藤** 現在、振り返るとひまわり運動の意義は何でしょうか。

**周** 二〇〇八年から一三年のあの時まで、台湾社会は強烈な敗北主義に充ちていました。立法院に突入したあの晩、わたしたちはこの敗北主義を打ち破ったのです。わたしは、運動は戦後の戒厳令下で

植えつけられた、台湾人の政治に対する冷淡な姿勢をひっくり返したと思います。とりわけ若い世代が公共的な問題に積極的に関心を持つようになりました。彼らは政治的な話題を避けようとするこれまでの世代と違います。

わたしは、戦後台湾の民主化運動の蓄積がすべて、立法院を占拠したあの二〇日あまりに表出されたと思います。政治的に迫害を受けた人たちが運動の現場である立法院にやってきて、戒厳令体制下での自らの経験を語りました。若者はそこで民主化運動の歴史を改めて学んだのです。

対外的には国民党と中国共産党が進めてきたプロセスを中断したと思います。共産党はこの数年、経済的手段によって政治的に圧力を加えていました（「以商逼政」）。ひまわり運動は一定程度、これを遮りました。さらに、世界に向けて台湾の存在を明らかにしました。ひまわり運動では、台湾社会の青と緑の分裂、イデオロギー上の分裂を乗り越えました。少なくとも若者世代は乗り越えました。中華民国旗を振ろうが振るまいが、みな台湾のために何ができるかを考えました。あのような思いの

共有はしばらくなかったと思います。

**佐藤** 馬政権の支持率は、第二期が始まった二〇一二年から、既然大幅に低下していました。

**周** しかし、わたしたちは強烈な無力感を感じていました。何をしても無駄だと。二〇一三年、大埔の張さんの薬局が取り壊された時は苦痛でした。その上、最後には張森文さんは自らの命を投げ出してしまいました。

社会全体が悶えていました。どんなに努力をしようと、出口がみえませんでした。洪仲丘が軍で虐められて死亡し、二五万人が凱達格蘭大道に押しかけましたが、体制の改革はとても緩慢というか、進むようにはみえませんでした。**佐藤** ひまわり運動の後、黄国昌ら運動のリーダーは政党を結成しました。

**周** 黄さんらの政治路線はよいと思います。社会運動はその理想を実現するために、政治における代行者が必要です。また、二〇一六年の総統選挙で民進党は勝ちましたが、その一部は国民党に対する人々の失望によるものです。民進党のあらゆる政治家が多くの支持を得ているわけではありません。

民進党の腐敗を避けるため、運動のなから政治に参加するという路線は必要です。

**川上桃子** 周さん自身のひまわり運動後の選択について、もう少し詳しくお話ししてもらえませんか。**周** わたしは誰かが民間に残る必要があると思いました。馬政権は多くの課題を残しました。その解決に対して、民間から支援したり、発言したりすることが必要だと思います。

わたしにも地方政府の文化局長をしないかとか、立法委員に立候補しないかという誘いがありました。しかし、わたしは、二〇一六年はその時ではないと思いました。なぜならば、民主主義はまだ完成していないからです。わたしは民間から監視することができず。**川上** その場合、重点は何になりますか。

**周** わたしは公共的な問題に関心を持つ若者を見つけ出し、彼らと連携していきたいと思っています。特に地方においてです。彼らに政治的な仕事に就いてもらいたいと思います。選挙に出るといっただけではなく、行政で働くこともよいと思います。**川上** どのようにしてそれを進め

ますか。

**周** わたしたちは地方で文化活動を行っていきます。わたしたちの活動は新しい思想や観念を採り入れています。たとえば頼和音楽祭では、彰化で働く若者と連携しています。彼らは彰化に戻り、文化関連の仕事をしたり、自ら店を開いたりしています。また、わたしたちの基金会ではボランティアの育成もしています。このような過程を通して、若者の地域に対する見方、台湾政治に対する見方を理解できます。実際、わたしのネットワークは徐々に広がってきています。そうすることによって、この地方のこれまでの低劣な公共政策と派閥政治を転換できるだろうと思っています。

政治活動はわたしたちの父母の世代ではネガティブにみられていました。しかし、二〇代から三〇代わたしたちの世代では、価値のある仕事だという見方になりました。

**佐藤** 今、台湾社会にとって重要な問題は何かでしょうか。**周** たくさんあります。中国の脅威は依然としてあります。

内部的には民主化は完成しましたが、移行期正義の問題は未解決

です。さらに悪いことに、貧富の格差が拡大し、若者が経済的な困難を抱えるようになっていきます。また、経済開発優先の考え方は残り、主流の価値観を形成していますが、一方では環境の持続可能性や温暖化対策などは、今後の台湾の課題です。どれも容易に解決できるものではありません。

**佐藤** 蔡總統の就任演説はどう思いましたか。

**周** 蔡總統の就任演説は台湾社会の実情に沿ったものだと思います。少なくとも若者の経済的な困難を認識しています。しかし、どう解決するかは簡単ではありません。今の低賃金では、若者は家を買えません。しかも、投機によって不動産価格は高騰しました。これでは結婚も、子どもを持つこともかきません。その結果、少子化が進みます。

派遣労働の問題はますます深刻になっていきます。一方、中小企業は人手不足です。技術教育が衰退し、マッチングがうまくできていません。高等教育では学費が上がっており、在学中にローンを背負うようになっていきます。

台湾では、若者の困窮は努力が足りないからだという考えがあり

ます。わたしたちの父母の時代には経済成長が進み、努力さえすれば何でもできるように考えられていました。しかし、今の若者の経済的な困難は構造的なものです。今の経済構造にはよい作用もありません。一部の若者は、たとえば台北を離れ、故郷に戻って仕事をみつめようとしています。

**佐藤** 仕事を探す若者の一部は中国に向かっています。

**周** 若者のこのような選択は理解できます。生活のためにみつけた機会ですから。台湾は本来、自ら機会を探そうとする人たちが住む島国です。

中国で働いていても、台湾へのアイデンティティーが失われるわけではありません。むしろ実際の中国での経験によって、台湾の民主主義をより貴重なものと感じると思います。頼和文教基金会に關わった若者のなかにも、中国で働いている人が何人もいます。ひまわり運動のなかにも、中国にある台湾企業の経営者（台商）の子女がいたようです。

**佐藤** 若い世代にとって台湾とは何でしょうか。

**周** 若者にとって、台湾とは自らが生まれた土地であることは疑う

余地がありません。台湾は彼らがアイデンティティーを持つ国家です。それが中華民国であっても。民主化とともに、またそのもとでの教育によって、二〇〇〇年代に大きな変化が生じました。中国へのアイデンティティーは文化的なものに限られます。

**佐藤** 林佳龍台中市長は一八年前、当誌の第三九号（一九九八年一月）で、中国文化には強烈な正統意識と、中華文化中心主義があると述べています。

**周** 今の若い世代は、多元的な文化の并存という考え方を持つようになっていきます。特に高校歴史教育課程網要改訂反対運動（反課綱微調）では、国民党的な中国文化は要らないと考えました。彼らは原住民の文化や新移民の文化に共感を持っています。もし幹があるとするれば、台湾文化の主体性でしょう。

ひまわり運動では、四月一日に立法院で、魏徳聖監督の「KAN O」という映画を上映しました。上映後、もう夜の二二時になっていましたが、拍手がなりやまず、多くの人たちが話し続けました。日本統治時代、嘉義農林の野球チームは多元的な民族から構成され、

甲子園で戦いました。その不敗の精神はひまわり運動にも通じると思いませんか。

ほとんどの若者たちが、両親にも運動に参加してもらいたいといっていました。そのなかには両親に連れられて、陳水扁に總統の辞任を求めた赤シャツ隊に加わった人もいます。選挙では国民党に投票してきた人もいます。

台湾がより自由に、民主的になるほど、人々の台湾アイデンティティーは強まり、中国と一緒にいたいとは思わなくなるでしょう。「天然独」は台湾の民主主義が厚みを増すにしたがって成長します。それは台湾が環境の持続可能性、移行期正義、人権の尊重といった価値を実現することを通して成し遂げられます。そうすることによって、台湾は世界が認めざるを得ない国家になります。若い世代がそれを達成すると信じています。

（二〇一六年八月二五日、頼和文教基金会にて。  
聞き手・抄訳 佐藤幸人・川上桃子／アジア経済研究所 新領域研究センター）